



## 「私と青年団」



### 日野町連合青年会 増田 早紀

私が青年団活動に参加し始めたのは8年前で、高校生の時から青年団に興味があり、皆が活動する日野町連合青年会事務所、通称、団室に行きました。そこで皆が笑顔で楽しそうに話したり、地域を盛り上げようという意識や事業の準備をしている姿を見て魅力を感じ、そのまま入団しました。しかし近年、若者の中で「青年団」と聞いて、どのような活動をしている団体なのか知らない人や「青年団」を知らない人が増えてきました。私自身も青年団に入るまでは、駅伝大会以外の事業や活動しているメンバーも知りませんでした。

青年団とは社会教育団体に位置し、二十代から三十代の青年男女により組織されています。活動を通して幅広い年齢の方々と交流しながら、町民の方々とともに地域活性化を根底におき活動している団体です。

私は今、日野町連合青年会、通称、連青に所属し日野町を舞台に日々活動しています。私が所属している日野町連合青年会は今年度で結成60年目を迎える歴史ある団体で、現在団員数は九人と小人数であり、一時に比べ団員数は減少しました。しかし少人数でも元気で勢いのあるメ

ンバーも多く、機関紙『ひのせいねん』年六回の発行や、日野町のイベントでの模擬店出店や町内の清掃活動、主催事業では駅伝大会やサンタが日野にやってきたなど活動内容はとても充実しています。その他にも日野町の様々なイベントに積極的に参加し、団員自身も楽しく活動しています。また、西大路地区では西大路ユースクラブも活動しており、どろんこバレー大会や八時間耐久ソフトボールなどを開催し、互いに切磋琢磨し合いながら活動に励んでいます。

青年団活動は地域の方々とは触れ合える場だけではなく、自分自身も成長できる場であると感じています。私は青年団に入る前は自己主張や団体活動が苦手で、話し合ったり、何か一つのを作り上げたりすることが好きではありませんでした。しかし、青年団で活動し、たくさんの人と関わり一つの事業を作り上げることで苦手で避けたかった団体活動と向き合うようになり、楽しさや辛さ、大変さを感じるようになりまし。また、青年団活動をしていく上で団員同士のコミュニケーションは必要不可欠です。以前から若者のコミュニケーション能力の低下が問題になっていますが、私達、日野町連合青年会の団員も例外ではありません。自分の言葉で思いを伝えられない、どの様に伝えて良いか分からない、本音を言えないなど様々な問題があります。それは青年団活動を続け、多くの青年男女が集うと個性もあり、団員同士のすれ違いや不満が

生まれるのは当たり前だと思います。しかし、その時に十分に話し合えないと団員同士の溝が生まれ、楽しさも半減します。それを防ぎ互いに刺激を受け、楽しく活動していくためには本音でぶつかり合いを受け入れ、認め合うことが必要だと思います。私は青年団をしていなければ人と真剣に向き合い、話し合うことはそこまでなかったと思います。活動を通してたくさんの人や先輩方と話すことで自分では気付かなかった視点からの考え方に気付かされ、自分自身の考える視野を広く持てるようになり、人と関わるのが好きになりました。そんな私が今年度会長として活動し、まとめる力も足りず、人前で話す事も苦手です。教壇に立つのは不安がありました。しかし、一緒に活動する仲間や先輩方の支えがあり、やってこられました。青年団は仲間同士支え合い、助け合うことの大切さを再確認できる場であり、新たな自分に気付ける場でもあると思います。

現在青年団員は減少傾向にありますが、五年後・十年後、日野町は若者を中心とし、活気ある地域になっているでしょうか？私は五年後・十年後、その先も若者が中心に立ち、地域を引っ張って行ってほしいと思います。

最後に青年団の魅力は、地域のために仲間とともに楽しく活動し、今できることを精一杯行い、自分自身も成長できることだと思います。青

年団だからこそ、同世代の人が集まり、意見を出し合い、試行錯誤しながら一つの物事を作り上げられると思います。仕事や学校とは違う責任感や団体行動を経験できる場であり、地域に根づいた活動を行い、地域と繋がり、活気ある町にしていくことが青年の役割でもあると思います。そのためには私達若者に何ができるのかを考え、地域へ発信していくことが大切であると思います。活動を通じて地域や社会との繋がりを持ち、精一杯その時代の一瞬一瞬に自分自身の居場所を確認し、仲間や自分と向き合い、活動を通じて自然に成長していけるこの団をこれからも大切にしていきたいと思えます。そして、伝統ある青年団の歴史や想いを引き継いで活動し、次世代に繋げていきたいと思えます。

